障害者の自立生活前後の「あきらめ」の変化

－自立生活センターで仕事をしている肢体不自由者へのインタビューから－

立教大学コミュニティ福祉学研究科博士後期課程　　金在根（７６１１）

キーワード：「あきらめ」、肢体不自由者、自立生活

１．研究目的

「あきらめ」というと、‘○○を断念する’という否定的イメージが強いが、本研究では、「あきらめ」を、欲求の発生からあきらめ切るまでの一連のプロセスとして捉え、個人に関わる否定的側面より肯定的・社会的側面に焦点を当てる。以前、障害者は親元もしくは施設で生活することが普通であったが、自立生活の理念が導入されて以来、多くの障害者が親元や施設から離れ、地域で介助サービスを利用しながら暮らすようになってきた。そこで本研究では、自立生活センター（以下、CIL という）で仕事をしている肢体不自由者の施設や親元で生活していた時の「あきらめ」の経験と、自立生活をしてから現在に至るまでの「あきらめ」の経験を比較し、自立生活前後の障害者の「あきらめ」の内容の変化を明らかにする。

２．研究の視点および方法

ここでは、障害は社会によって作られたものとする「社会モデル」の立場から、障害者の「あきらめ」も社会からの影響を受けているものという視点を持つ。研究対象者として全国から 23 ヶ所の CIL を選び、その CIL で仕事をしている肢体不自由者 48 人に対して、「あきらめ」のイメージや過去と現在の「あきらめ」等に関するインタビュー（半構造化面接）を行った。インタビュー時に録音の許可をいただき、音声データを逐語化した。逐語の中で「あきらめ」と関係する内容を整理し、類似した内容ごとに分類する類型化の作業を行った。

３．倫理的配慮

インタビュー前に郵送で研究対象者に研究の目的、方法そして、質問の内容を伝えた上で研究協力の同意を得た。また、研究のまとめについては名前、所属機関等の個人情報は匿名にして研究対象者が特定できないようにし、本人の確認と了承を得た上で公表することにした。

４．研究結果

過去と現在の「あきらめ」の内容とその頻度は表のような結果となった。「性・異性関係」について、自立生活前には 48 人中約半数の人（23 人）が「あきらめ」を経験していたが、自立生活後は僅か 4 人からの答しかなかった。

具体的には、自立生活の前は‘彼女を作ること’、‘二人でデートすること’等「異性関係への『あきらめ』」が最も多く、‘女性として見られること’、‘自分が女なんだという感

表　過去と現在の「あきらめ」（複数回答）

順位	過去の「あきらめ」（人数）	現在の「あきらめ」（人数）
1	性・異性関係（23）	介助者との関係（15）
2	希望・趣味　（22）	な　い　（12）
3	学　校　（16）	生活スタイル　（6）
4	仕　事　（14）	性・異性関係　（4）
5	移動・外出　（14）	移動・外出　（3）

覚 ’ 等「自分の性的自尊心への『あきらめ』」、そして、‘ エッチな本を買うこと ’ や ‘ 自分が彼のことが好きだということを親に知られてはいけないと思った ’ 等「性・異性に興味を持つことへの『あきらめ』」といった傾向が見られた。一方、現在の「あきらめ」においても、‘ 異性と付き合うとか、そういう観点で見たことがない ’ 等「異性関係への『あきらめ』」、事業所で男性介助者が少ないため ‘ お風呂での同性の介助者 ’ を「あきらめ」ることや、同性同士でも、‘ お風呂やトイレなどで体(裸)を見られること ’ に抵抗を感じながらも「あきらめ」る等「自分の性的自尊心への『あきらめ』」が見られた。また、常に介助者が側にいるため ‘ アダルトビデオを見ること ’ を「あきらめ」る等「性・異性に興味を持つことへの『あきらめ』」も同じように見られた。つまり、「性・異性関係」に関して、「あきらめ」を経験する頻度には過去と現在に大幅な差がみられたが、その内容を見ると、「あきらめ」に関係する者が親または施設職員なのか介助者なのかの違いがあるものの、過去と現在には類似の「あきらめ」が存在することが分かった。

「希望・趣味」については、過去に多くの人が「あきらめ」を経験していた。‘ 自転車に乗ること ’、‘ 体育の授業での縄跳び ’、‘ 体を動かすスポーツ ’ 等身体的動作が伴うものに関する「あきらめ」が圧倒的に多かったが、その他、‘ 温泉で断られる ’、‘ 映画館の見やすい席 ’ 等直接的に身体的動作と関係しない「あきらめ」もあった。一方、現在では、このような「希望・趣味」に関する「あきらめ」がほとんどなかった。そして、身体的動作を伴うものやそうではないものについても、今出来ていないこともいつかは出来るようにしたいと考えている人が多かった。

学校については、‘ 地元の普通学校に行きたい ’ という「あきらめ」が一番多く、一方、普通学校に通っている人からは ‘ 養護学校に行きたい ’ という「あきらめ」もあった。その他、‘ 大学に進学したい ’ 等の「あきらめ」もあった。仕事については、‘（一般就職して）仕事をすること ’ が一番多かった。学校や仕事については、就学年齢を過ぎたことや CIL で仕事をしているが対象であったため現在では回答を得ることが出来なった。

「移動・外出」については、過去に ‘ 電車やバスに乗ること ’ を「あきらめ」ていることが一番多く、その他 ‘ 車の運転 ’ 等を「あきらめ」ていた。一方現在では障害者の移動関連の制度的保障が進んできたこともあり、バリアによる制約より介助者の交代時間等、介助利用関係での外出の制約等が少し見られた。

現在の「あきらめ」で最も多く見られたのは「介助者との関係」であった。過去の「あきらめ」でも親・施設の職員という介助者に当る存在が「あきらめ」の裏に隠れていることはある意味当然である。しかし、過去には直接関係するものとしては捉えられていなかったが、現在では直接関係するものとして現れた。「生活スタイル」の内容も「介助者との関係」と深く関係していた。

多様な過去の「あきらめ」内容は現在では縮小され、なくなったように見える部分もある。しかし、これについては「自分の出来る範囲の中でしか動いていない」等から「全部自分で出来る感覚」に陥る傾向があるという指摘があり、今後検証が必要である。一方、過去の「あきらめ」の一部は現在にも類似した内容として残っている。また、過去には明確に出なかった介助者を介した「あきらめ」が現在には最も影響を与えていることが分かった。